和文仮訳

持続可能な開発のための国連ハイレベル政治フォーラム（HLPF）
SDGsに関する自発的国家レビュー（VNR）発表
（２０２５年７月２２日（火））

宮路外務副大臣

議長、御列席の皆さま、

本日、日本の第３回自発的国家レビューを発表できることを大変嬉しく思います。

日本はぶれることなくSDGs達成に向けた取組を進めます。今日、皆様にお伝えしたい３つのVNRの教訓があります。

１点目は、幅広いステークホルダーの関与です。少子高齢化、地方創生、防災といった課題の解決の鍵です。

２点目は、成長と持続可能性が両立するということです。これがSDGs達成への現実的な道です。社会課題の解決を成長のエンジンへと転換させなければなりません。日本は人への投資、グリーン・デジタル化などに戦略的に取り組んでいます。

３点目は、ＳＤＧｓのベースとなる知を巡る国際社会の活発な交流・交換。現在、こうした知的交流の場となる大阪・関西万博が、日本で開催されています。

和文仮訳

議長、

日本のSDGsは、多くの分野で着実に進展しています。人々の健康寿命はこの２０年間で３歳程伸びました。２０２３年度の温室効果ガス排出・吸収量は記録的な低下となりました。ジェンダーなど更なる取組が必要な分野もあります。

SDGsの実現には、全ての人による連帯した取組が一層重要です。これは、日本が、人間の安全保障の推進を通じて訴え続けてきたことでもあります。今回のVNRも、「誰一人取り残さない」、そして「その実現にどこでも誰でも貢献する」を強調しています。

ここで、一人の勇敢な車いす使用者のエピソードを紹介したいと思います。彼女は、後天性障害により、自分の体を動かすことができません。彼女が、バリアフリー情報を共有するアプリを開発しました。このアプリにより、車いす使用者が取り残されない社会の実現に、当事者も含めて、だれもが大きく貢献できます。

そして、もう一つ、SDGsにはイノベーションの進展が重要です。どこでも利用できる次世代太陽電池の導入はその好例です。

ここでビデオをご覧ください。

（ビデオ放映）

この場に、円卓会議の皆様とともに、織田友理子さんにも来ていただいています。この後、織田さんから一言、その後、千葉さんからも発言頂きます。最後に蟹江教授に発表をまとめて頂きます。

織田友理子氏（特定非営利活動法人ウィーログ 代表理事）

この歩みの中で私が学んだのは、障害があっても、人や社会に貢献できるということです。

着たい服を選び、行きたい場所へ行く――その自由があっていいのです。

適切な支援があれば、重度の障害があっても豊かに生きることができます。

今日という日が、「何もあきらめなくていい」と信じるきっかけになることを願っています。

誰もがどこへでも行ける世界を、一緒につくっていきましょう。

千葉 宗一郎氏（サウザンドリーフ合同会社 会長）

議長、御列席の皆さま、

千葉宗一郎と申します。日本の「SDGs 推進円卓会議」において、民間構成員を務めております。

本日は 3 点にわたり、私の考えをお伝えしたく存じます。

まず第一に、多くの国々と同様に、日本もいくつかの課題に直面しております。その一つが、SDGs の取り組みが人々の「日々の幸せ」と結びついていると、十分に実感されていない現状です。私たちの調査結果に基づく限り、「幸せ」に影響

を与える主な要素として、健康・成長・そして深いつながりの3つが挙げられると認識しています。これらは互いに密接に関連し、相乗効果をもたらします。
もしSDGsが人々を幸せにしていないのであれば、そこには本質的に欠けている要素があるのかもしれません。私たちは、その欠けている要素こそが「成長」であると考えています。

第二に、持続可能な成長を実現するためには、各国が「破壊的イノベーション」を自らの力として育てていくことが不可欠です。破壊的イノベーションとは、既存の制度や仕組みを根本から変革するアイデアを商業化することで生まれます。これは、インフラ整備に注力する国よりも、製品開発やグローバルブランド、デジタルプラットフォームなどを通じてインフラを価値へと転換する国の方が、しばしば高い成長を遂げていることからも明らかです。

第三に、SDGsの達成に向けて破壊的イノベーションを加速するためには、すべての世代——とりわけ変革を担う現役世代——への支援が極めて重要です。そのためには、まず彼らがどの分野で挑戦すべきかを示す明確な方向性と、それを担う司令塔の存在が必要です。さらに、選ばれた分野において実際にビジネスを立ち上げ、商業化へとつなげていくための支援体制——人材育成、制度整備、そして挑戦を後押しする社会風土の醸成——が不可欠です。これを実現するには、政府・学術界・民間セクターが緊密に連携し、それぞれの強みを持ち寄ることが求められます。

私たちは、「成長」とSDGsをしっかりと結びつけることで、より多くの人々が豊かさを享受し、そして真の意味で幸福

を実感できると信じています。

これこそが、私たちが提唱する 「ハッピー・エコノミクス（Happy Economics)」 のビジョンです。そして日本は、このイノベーション主導の持続可能な社会モデルの実現に向けて、国際社会と手を携えながら、力強く取り組んでまいります。

ご清聴、誠にありがとうございました。

蟹江 憲史氏（慶應義塾大学大学院 教授）

今回のVNRには、２つの重要な特徴があります。

一つ目は、ステークホルダーによる評価を十分取り入れた点です。グローバル指標により進捗を測ることは重要ですが、それだけでは実施の全体像を本当の意味で把握するのは困難です。ステークホルダーによる評価によって、実施の現場で何が実際に起こっているのか、定性・定量の両面から実体がわかるようにしました。その中には、政府の行動を批判的に検討するものも含まれています。しかし、研究の世界ではよく言われるように、批判がないところに発展はありません。批判を含めた評価をVNRの中に入れていることこそ、日本のVNRの強みだと思います。

二つ目は、プロセスです。ステークホルダーによる執筆が重視されました。その間、政府・非政府団体を含むマルチステークホルダー会合も開かれ、パブコメを経て最終セットされました。持続可能な開発のレジェンド、モーリスストロングさんは、かつて「プロセスがポリシーである」と言いました。今回の日本のVNRはこのことを実践したと考えますし、日本

の民主主義のあり方の一つのモデルを示したのではないかと思います。

評価をなぜ行うのでしょうか。評価は将来の改善に資するためです。現状評価をビヨンドSDGsのあり方の議論へとつなげることが重要だと思います。日本ではマルチステークホルダーによる対話が９月から開始されます。私としては、建設的な批判やプロセスの重要性を念頭に置きつつ、この対話をアジアやその先に広げていき率先できればという思いがあります。

ご清聴ありがとうございます。

（了）